

『学校沿革』を読む

—— 学校文化の社会史研究に向けてⅡ ——

仲 嶺 政 光

(富山大学地域連携推進機構生涯学習部門准教授)

本稿は、沖縄県金武^{きん}中学校（以下金武中）に残され、今も執筆が続けられている『学校沿革』という文書をもとにした、学校文化の社会史的事例研究である。『学校沿革』は、金武中の校長が執筆を担当した日々の記録である。これを解読するにあたり、①その文書に何が書かれているのか、②それはどのように書かれているのか、という両面的な観点を設定することが可能である。筆者は先に、ある小学校の『学校日誌』をとりあげ、主に②の観点により明治期から戦後までを通じた書誌的な分析を試みた（仲嶺 2018）。

このたびは、新制中学が築き上げてきた学校文化の事例をとりあげることになる。戦後初期の窮乏に満ちた出発期から、高度成長を経て企業社会体制が成立・確立・動揺していく時代的背景の中で、学校の中で培われた文化がいかなるものであったのか、ここではその長期的変遷を素描していきたい。



1. 戦後新制中学の学校文化

——競争の抑制から開放へ、そして行き詰まりへ

学校文化とは、子ども・若者の人格発達をある特定の《型》に向けて馴化させ／あるいは引き上げ・支えるという二重の意味合いを持つ概念であり、それは学校の制度文化、教員文化、生徒文化、校風文化などなどの下位文化との関係の中で成り立っている（久富 1996：10-11,16-20；2006：29-30）。そして当然ながら、そこにはある《型》に向かわせる人間形成の過程で学校の秩序が何らかの形で成立していることが不可避的に求められ、その外化された形としては各学校の校風文化に結実することになる。新制中学は各学校段階の中でも特に学校秩序の形成・維持の難しさを抱えるものである。

新制中学は、その名の通り中間的な性格が備わっている。一方で新制中学は、学区内の小学校からの進学者たちによってメンバーの再編統合がなされる場であり、他方では高等学校という上級学校をひかえ、そこでの学力競争の結果人材配分が機能する場ともなる。ただ、その新制中学の性格は戦後史を通じて大きく変貌しており、一様ではない。ここでは、久富善之による戦後時期区分論（**図表 1**）を参考に、新制中学の戦後史的展開について大きく初期段階・中間段階・後期段階の三つに分けて概観してみよう。

図表1 戦後史のなかの学校文化と地域文化との関係・4段階

期		I	II	III	IV
年代		戦後改革～ 1950年代後半	1960年前後～ 1970年代半ば	1970年代半ば ～1990年代初頭	1990年代半ば ～今日
時代と社会		戦後窮乏期から、 経済復興へ	高度経済成長と、 巨大な地域人口移動	安定成長から、 バブル経済崩壊	バブル崩壊・長期不況、 「改革」時代と格差拡大
進学率	(高校へ)	40%～50%台	58%→90%	90%台前半停滞	90%台後半
	(大学へ)	10%	10%→38%	30%台後半停滞	40%→50%
学校と職業社会のつなぎ		学校を通さない回路 「二重構造」格差	「学校を通す」の広がり 進路振り分けと上昇	中卒のマイノリティ化 高卒労働力安定供給	若年失業増加と非正規 雇用の常態・半数化
学校と父母・地域との関係		学校の「進歩性」 「信頼」と低い関心	進学文化の広がり 学校への期待	学歴獲得競争激化 高い関心と「不信」	競争の局部化 関係再編への動向
学校知識への 意味づけ	(生徒の)	階層的分化・乖離	開かれた社会への道	競争手段として	学校知識離れ
	(父母の)	基礎学力と階層分化	学校知識の抽象化	家庭の学校化と期待	当事者要求増大
	(地域の)	学校への二律背反	学校価値の浸透	学歴期待の手段	学力と人格形成と
(生徒・父母・地域にとっての) 中学校からの進路の位置		就職がまだ多数 一部での受験競争	「進学組」「就職組」 受験競争の広がり	高校進学「当たり前」 受験競争の秩序化	どの道も就職不安 受験の緩みと就職難
学校文化内での 意味づけ	(生徒は)	「明るく伸びやか」	努力主義の学力形成	被抑圧と問題行動	学校離れへの危機感
	(父母は)	階層による二極化	子どもにとっての基地	家庭教育力の弱まり	不安と格差を抱えて
	(地域は)	物質的援助と支え	変動・変貌・開発	地域教育力の崩壊	再生への期待

久富（2006：31）より転載。

初期段階 まず、新制中学は抑制された競争期（第Ⅰ期：戦後改革～1950年代後半、久富1993：22表1-1）から出発した。社会全体の〈学校化〉が進み、過剰な学力競争が問題とされるようになって久しい今日からみて、進学に抑制が効いていた時代を振り返ると、図表1の表現を借りるなら若者たちにとって「明るく伸びやか」な世相を感じさせる。しかし同時に、新制中学にとっての抑制された競争期とは、進学抑制をめぐる力関係を象徴するともいえる「学校知識と生活文化の乖離」（久富2006：32）のもと、まさに同時代特有の課題を抱えた時代でもあった。同時代は、おそらくは家族の向学校的な気質の高さに恵まれた高校進学者たち（全体からみて4～5割程度にあたる）が進路を定めた一方で、他方には進学を果たしたい若者と家業を継いでほしい家族や親族の要望との間で葛藤した層、さらにはそもそも高等学校への進学の意志をもたない若者たちも古い時代には比較的多く存在したであろう。学力競争への参与という観点からみて、抑制された競争期はこのような三つの若者たちの層が混在していたといえる¹⁾。就労は「学校を介さない回路」が健在であり、若者の人生軌道はなお学校の内部に閉じてはいなかった。戦後初期に生まれた新制中学は、まずはこのように重層的な若者たちに対し一律の中等教育を展開しなければならなかった。つまり、どうすれば競争秩序に対し濃淡のあるそれぞれの層にとって、等しく意味のある学校生活現場を築くことができるのか、という基本的な課題に直面し、その具体的解決策を創出することが新制中学には求められたのである。例えば初期段階金武中の場合、地域産業と密着しその労働的価値を積極的に取り入れた「生産教育」と、課外時間に実施された受験指導とが両面的に展開されるなど、地域社会との文化的な混交・妥協のなかで学校秩序の形成・維持が実現されていた（仲嶺2019）。

中間段階 新制中学は高度成長を迎えて以降きわめて大きな変貌を遂げる。第Ⅱ期（1960年前後～1970年代半ば）には高校進学率が劇的に上昇し40～50%から90%台となり、大学進学率もまた10%から38%にはね上がる。以後第Ⅲ期（1970年代半ば～1990年代初頭）の終期にあたるバブル

経済の崩壊に至るまでに、新制中学は強固な競争秩序と進学行動が確立し広範に及ぶようになる（高校進学「当たり前」化／中卒のマイノリティ化）。初期段階において、時には進学の足かせとなり、また時には生活基盤を確保する上で頼みとすることができた地域共同体は、その人間形成上の影響力を次第に弱め、〈学校化〉された社会が本格的に到来することになる。背景には、学歴主義を支持する企業社会の成立・確立などがあつた。このようにして、心身の発育が著しく、かつては「疾風怒濤」（G.S.ホール）などとも表現された波乱に満ちた人生段階にある若者たちは、ほぼ全体が地域社会の諸文化と距離を置き純化された学校文化の内部に囲い込まれ、そのなかで生徒文化を自らのものとして獲得しこれを生きるようになる。新制中学はそれらを望ましいものとして促進し励ましたり、逆に押さえ込んだりしながらコントロールせねばならない役目を負うようになる。中間段階半ばごろ以後、あらゆる新制中学で細かすぎる校則、徹底した管理主義の様相の広まりと、多くの若者たちがこれに反抗し対抗文化の隆盛をきわめたことはよく知られた事実である。

後期段階 第Ⅳ期にあたるバブル経済の崩壊以後、1990年代半ば以降になると、高校進学率は90%台後半、大学進学率は50%を超えるまでに上昇する。だが、企業社会・労働市場側の学歴主義と終身雇用体制の緊密な結びつきが瓦解し、就労の非正規化・不安定化と格差拡大が進むなかで、中間段階で若者たちを広範に巻き込んだ競争秩序は緩みをみせ上層を中心に局部化していく。ここにおいて、学校で学ぶことの意味、一つの学校の生徒らしい生活を送ることの意味がいったいどこにあるのか、ということが根本的に問われることになり、新制中学はまた新たな段階に突入する。あたかもその様子は、初期段階における新制中学の存在意義とは何かを模索する課題が再燃したかのようである。ただ、学校知識離れが進んだ今日ではあるが、では、学校を介さない就労の道が新たに鮮明化し、脱〈学校化〉へ向けての動きが広がったかというところではない。現在、少子化による間口の拡大もあって、高校卒業後に大学や専門学校に進学する若者は18歳人口の8割を超えている。学校知識・学校生活への意味づけが弱まりつつも、やはり学校は失業や不安定就労のリスクを回避したい若者たちにとって何らかの重要性を帯びざるを得ないものとなっている。すなわち、「就職できないのではという恐怖におびえた人びとは、追加的にこれまで自分が受けてきた教育とは別の教育を受けるか、専門の教育をさらに続けて受けるという傾向が増えてきている……働き口が不足している中でそれを得るためには、よい成績の卒業証書だけでは、ますます十分ではなくなっているが、同時にますます必要不可欠なものになっている」（バック訳書1986=1998：299,303）、いまはそのような時代が続いているようにみえる。ただ、現在はこの後期段階に入って20年以上が経過したわけだが、その間の学校文化・学校秩序がどのような変化をみせているのか、という研究課題は十分に開拓されていない。

2. 『学校沿革』の執筆秩序とその社会的背景

続いて、以上の時代類型を踏まえつつ、本稿で使用する資料の書誌的分析を進めたい。金武中『学校沿革』（以下この資料からの引用は年月日にて記す）は、新制中学の学校文化と学校秩序の戦後史的推移をうかがい知る上で興味深い資料である。人事異動による校長の交代により『学校沿革』は叙述スタイルを変化させる場合があるが、このことは、執筆者の個性によるものということだけでなく、ある教育課題を抱えた時代が生みだした存在である学校指導者によって導かれた書記文化的変容の一端ともみることができる。

当初『学校沿革』は、校長が管理職として学校で起きた日々の出来事の備忘を避けるために編まれるようになったと思われる。周年記念誌編纂に用いられることも想定されたかも知れない。そこに記された言説は、その執筆時点において、何が忘れてはならない事実とされたのか、そしてそれはどのように記述されているのか、をそれぞれ通観するための系統的な性格をもった資料であるといえる。本稿では、この資料とあわせて生徒や元教職員らの回想録などをもとに各時期の学校文化のありようを分析していくことにする。

『学校沿革』は三つに分かれて製本されている。第一分冊は1948～1955年度、第二分冊は1956～1964年度、第三分冊は1965年度から現在に至るまでである（第二分冊からは『学校沿革誌』と改称される）。『学校沿革』の執筆が開始されたのは、金武中開校直前の1948年3月19日である。当初は記入用紙に白紙が用いられ、また毛筆で執筆されていた。白紙は記入行為の自由度が最も高い用紙である。開校当初の揺籃期は学校での出来事が多岐にわたるものであり、白紙に自由に記すことがその時代にふさわしいものだったのかも知れない。実際、初期段階にあたる『学校沿革』の記述は、日記ないし学校日誌さながらの詳述の様相を帯びており、多種多様な出来事が記されていた。この時期は日付を記すこと、小見出しや「・」などの記号を付すことによって記事のアクセントがつけられた。

1957年度に初代校長が転任になるのを期に、『学校沿革』はペンで執筆されるようになった。さらにその後、1965年度からは記入用紙が白紙から罫紙に変更された。この間、再び校長交代のあった1960年度からは諸行事を日付の下に短文箇条書きで記す形が多用されるようになり、以前の日記風の叙述スタイルは学校の年間行事スケジュール表の如きものに変化した。行間に均一の秩序を与える罫紙はこのような新しいスタイルに適合的である。また、初期段階にしばしばみられた「本年度・次年度の努力点」「訓育面の努力点」「将来の努力点」などの学校固有のポリシーや反省点を振り返る記述は省略されるようになり、この点でも叙述スタイルの変化は大きい。その後、2008年度からは手書きではなく電算機器を用いて執筆されるようになり効率化がはかられ、記事のほとんどが一行で済まされるようになる。

この1960年度における記述方法の大きな変化は、金武中の学校運営において「その学校らしさ」というものが明瞭となり、学校の独自性が高まっていく過程と並行していた。その学校のシンボルとして最も大きな要素の一つである校章や制服・制帽はかなり早い段階で制定されていた。「女子の校服設定す 校章を決定す 中 KIN を図案化したもの 金武中等学校を示す」(1948.6.29)、「家庭科担任の某先生の指導の下に女生徒の制服が考案され、米軍払い下げのHBTを材料に女子制服が出来上って行った。更に、男子生徒は校章(某校長考案)に二本テープの制帽が出来上がり、生徒は一段と自重心と中学生の誇りに燃えて来た」(松岡他1994:166)、「校章(徽章)六〇〇個注文し日本製の立派な徽章が出来上品になった」(1952.5.26)。**図表2**は、金武中で制定された最初の校章(1958年ごろに現在のものに改定する)である。



図表2 金武中最初の校章(1948.6.29)

ただ、金武中は、開校当初は教室、職員室、運動場などが金武小学校と「同居」で、両校が未分化な状態だった。1950年に現在の幼稚園の敷地に移転するも、両校の混交状態は続いた。「私たちは小学校の校歌を歌いましたよ。卒業式に〔1953年度卒業生〕」（金武中学校 1999：201）、「金武中学校合同運動会を開催」（1960.10.16）。

これに対し「旧敷地から新敷地へ移転」（1961.2.20）前後になると、金武中を象徴しその独自性を印象づける諸要素の数々が形づくられ、一定の自律性をもった学校として対外的な交流や支援を受ける姿もみられるようになった。

- ▲校歌制定。（校歌の作曲が、文教局学校教育課長某先生によって出来上がった）（1958.10.16：同じ時期に校歌ダンスも創作された）
- ▲制定された校歌を全校生徒に紹介する（1958.10.22）
- ▲キャンプハンセン〔米軍〕による運動場均し作業（1961.5.11）
- ▲秋田市南中学と交歓のため左記職員生徒出発 生徒某（三年）〔以下略〕（1963.7.22）
- ▲図書館落成式（1964.10.23）
- ▲秋田市南中学校から図書の新刊〔600冊〕（1964.12.19）

『学校沿革』の執筆状況をもう少し詳しくみてみよう。**図表3**は、1950～2010年度の『学校沿革』10年きざみ7年度分の執筆文字数を数え上げ、年間平均文字数（1年365日を分母とした）・標準偏差・標準偏差÷平均＝変動係数を算出し執筆量に関する変化をみたものである。

図表3 『学校沿革』の平均文字数・標準偏差・変動係数

	① 1950	② 1960	③ 1970	④ 1980	⑤ 1990	⑥ 2000	⑦ 2010
平均文字数	5.54	1.18	3.75	9.02	4.44	3.41	4.38
標準偏差	14.37	4.80	16.20	24.17	6.53	7.12	8.49
変動係数	2.60	4.07	4.32	2.68	1.47	2.09	1.94

これをみると、日々の平均執筆量は1960年度で最も少なくなっていること、1950年度がやや平均値が高く、また1980年度でかなり大きな平均値を示しているのが目立つ。各年度平均文字数の多重比較では、

② 1960 < ① 1950*** ④ 1980*** ⑤ 1990*** ⑥ 2000*** ⑦ 2010***
② 1960*** ③ 1970* ⑤ 1990** ⑥ 2000** ⑦ 2010* < ④ 1980
* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

という結果となっている²⁾。1950年度は開校直後にあたり日々の出来事が多岐に及んでいたこと、1960年度は競争秩序が成立することで独自の性格を強め形式を整えていったために記述が少なくなっていること（あるいは記述するに値しないと判断された「当たり前」事項が多くなった、と言い換えてもよいだろう）、あとでみるように1980年度は生徒の諸活動に関する記述がきわめて多くなっていること、それ以後は低い平均文字数で推移していることがうかがえる。一方、変動係数に着目すると、1960・1970年度でバラツキが大きく、その他の年度は比較的安定した執筆ペースであったことがうかがえる。高度成長と重なった中間段階前半は新制中学が大きく変化する時代にあたり文字数の変動が大きく、それ以後は日々の『学校沿革』執筆行為がルーティンを確立していったこ

とを類推させる結果となっている。

このような『学校沿革』執筆状況の変化の背景をみてみたい。金武の戦後高度成長はどのような社会構造の変化をもたらしたのだろうか。岸政彦は、沖縄の高度成長について、日本社会全体と歩調を同じくし、離農と人口移動、世帯・産業構造の大きな変動がみられたことを指摘している（岸2013：91）。戦前期から戦後初期にかけての金武は農業が主な産業だった。これに対し高度成長以後は離農とサービス業の肥大化（米軍の規模拡大による要因もあった）がきわめて著しいものであった（金武町企画開発課1991：3-7）。その様子は国勢調査報告各年をもとに作成した**図表4**に明瞭にみてとれる。

図表4 金武町の産業構造の推移（%）

	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010
第一次産業	82.8	46.0	18.6	18.1	18.5	13.2	13.2
第二次産業	2.8	30.9	12.5	20.4	18.7	21.2	16.8
第三次産業	14.5	23.1	68.9	61.5	62.7	65.6	69.9

国勢調査報告各年より。

一方、**図表5**は学校基本調査報告書沖縄県版をもとに金武中卒業者の進路についてみたものである。地域の産業構造の変化を追いかける形で、金武中の高校進学者は1960～70年代にかけて大幅に増加し、1970年代半ばにはほぼ90%前後に及び高校進学が当たり前のものとなっていった。



『学校基本調査報告書』沖縄県版各年より。

3. 生徒諸活動の類型的分析

ここでは、各時期を通じて比較的一貫して記述されている生徒の教科外諸活動に着目し把握を進める。生徒の諸活動への積極的な参加は、それじたい学校の生徒らしい姿が実現された証のようなものであり、その学校の文化や秩序様態を把握する上で重要な観点である。

先に述べたように初期段階金武中では労働・実学重視によって教育の意義と秩序形成が模索されていたが、これに加えて勉学以外の生徒の体育系・文化系諸活動は必要不可欠のものであった。「金武村内野球排球大会に於て野球優勝す」(1948.6.26)「柔道場の設置」(1950.2.13)など、早い時期から教科外の活動が取り入れられ、勉学のみでは実感し得ない金武中の存在意義が調達されていった。今日でも部活動仲間と同窓会が開かれることは珍しくはない。W.ウォーラーによれば、「学校や教師がむずかしい生徒を扱う際、その一つの技術は、相手になにか運動〔athletics〕の興味をもたせてやることである」、また直接参加しない者も試合観戦を通じて「魂がきよめられる〔purged〕」効果がある(ウォーラー訳書1932=1957:150-151)。また、B.バーンステインは、「スポーツは、葛藤と競争をルールに従わせることを奨励する媒体である。この種の奨励は、統合型儀礼の一部をなす」(バーンステイン訳書1977=1985:77注2)と述べている。知的教科学習と試験が人を否応なく分断する働きを発揮するのは正反対に、文化・スポーツ競技の技の磨き合い、そして勝利へのこだわりや集中は、対抗勢力の存在を意識させ、同時にその集団に所属していることを深く実感させるものであり、自然状態ではバラバラな生徒たちを一気に一つの学校ないし学級・部活動集団にまとめあげる隠れた働きを持つ。「何も無い時代でしたので、生徒諸君が情熱を燃やしたのは、やはり野球、陸上、球技等の対外試合でした」〔柔道場が完成し〕生徒たちは、魚が水を得たようにぴんぴんと体を動かして稽古に励み、道場は活気にみちていた」〔野球〕応援団も先生方が中心となり生徒会も総力をあげて頑張ったお陰で、勝つことができました……応援歌を歌いながら金武中まで行進した。優勝祝賀会が催された」(松岡他1994:142,145,178-179)。

金武中生徒の諸活動は戦後70年余りにも及ぶ今日までの歴史を通じて大きく変化した。ここからはその変化がどのようなものだったかを論じていきたい。以下、『学校沿革』に記された記事を10年きざみ(1950～2010の7年度分)で拾い上げ、体育系活動とそれ以外の文化系活動の2つに分けて記事を略記し一覧として示したのが**図表6**である。

図表6 生徒の諸活動(体育系・文化系別)

年度	体育系記事	文化系記事
1950	水産祭行事で水上競技会 0619 / 村野球優勝 0621 / 地区野球 2位 0624 / 村排球男女優勝 0705 / 体力テスト 0707 / 地区排球 2位 0710 / 村陸上 1022 / 地区陸上 3位 1027 / 跳箱完成 1102 / 地区運動会 1113 / 柔道寒稽古 1224-31	校友会組織 0422 / 米軍・病院慰問の花束 0508 / 校友会予算審議 0512 / 母の会・学芸会 0514 / 米軍人を招待し学藝会 0526 / 夜間学習 0811- / 校内弁論大会 1209 / 地区学校美化品評会審査 1211 / 村内童話お話大会入賞 1213 / 地区弁論大会開 1216
1960	地区排球大会女子優勝 0604 / 地区野球優勝 0709 / 金武小中学校合同運動会 1016	米軍音楽演奏が金武小学校で開催 0527
1970	完全給食実施 0506 / 地区球技大会野球女子卓球優勝 0711 / スポーツ店より陸上トロフィー 5個寄贈 0919 / 秋季運動会 1010 / 地区陸上競技大会 2位 1108 / 校内クラス対抗駅伝競走 0313	ワニの剥製一個寄贈 0611 / 就職者合宿訓練 0310
1980	遠足 0425 / 県陸上 0525 / 地区卓球個人ベスト 8、ソフトボール優勝、男子バレー 2位、野球 2位 / 県通信陸上(九州大会出場) 0720 / 県大会野球、ソフト、男子バレー 0722 / 校内陸上、スポーツ店より新記録メダル十数個寄贈 0805 / 九州陸上 0808 / 全国校陸上 0821 / 県陸上 0928 / 地区陸上 1019 / 県陸上 1109 / 校内駅伝 1122 / 地区野球県大会 1221 / 地区ソフト優勝、テニス女子優勝男子バレーベスト 4 女子バスケットベスト 4 / 県新人庭球女子団体ベスト 8、0208 / 町バスケット優勝 0222 / 校内マラソン 0224 / 全日本陸上 0312	生徒会幹部宿泊研修 0524 / 知能・心理テスト 0530 / 生徒会総会 0606 / 県吹奏楽銅賞 0713 / 校内新聞 0717 / 県吹奏楽銀賞 0803 / 生徒会幹部宿泊研修 0819 / 授業ボイコット 1015 / 県作文、書道、図画 1020 / 2年修学旅行 1030 / 校内辞典引き大会 1111 / 各学年お話会 1113 / 校内お話会 1113 / 地区お話会 1125 / 校内合唱 1202 / 読書感想文、感想画 1203 / 県お話会 1213 / 生徒会正副会長選立合演説会 1216 / 新聞 1216 / 生徒会正副会長選 1217 / 学習発表会 0125 / 新春かきぞめ 0208 / 新入生説明会 0304 / オペラ鑑賞 0306

年度	体育系記事	文化系記事
1990 ※	集団訓練 0410 / 部活説明会 0420 / 部活動・父母の会結成 0424 / 新入生歓迎バレー大会 0509 / 県選手推戴式 0615 / 運動場整備 0815 / 運動会練習始め 0910 / 運動会 0930 / 地区陸上男 10 位女 12 位 / 地区駅伝男 15 位女 14 位 / 地区新人球技大会 1223 / 校内駅伝 0112 / 県バレー 0113 / 県中サッカー、軟庭、卓球、バレー新人大会 / 「たばこの害」講演会 0319	標準学力検査 0414 / 生徒会中央委員会 (年 9 回開催) 0420 / 生徒会専門委員会結成 (年 11 回開催) 0425 / 一年生野外炊飯 0502 / 読書月間 0521 / 生徒会総会 0531 / 校内美化 0621 / 修学旅行入札説明会 0705 / 修学旅行入札 0710 / 三年生補習授業 0723 / 米国ホームステイ出発 0726 / 修学旅行下見 0729 / 生徒会研修 / 映画撮影 0831 / 三年実力テスト 0904 / 学級意見発表会 1011 / 学年意見発表会 1030 / 町学力向上推進地域研究発表準備 1031 / 校内合唱 1115 / 三年生進路講話 1116 / 地区意見発表会 1120 / 三年生修学旅行 1202 / 県意見発表某入賞 1208 / 学力向上推進地域研究発表会 1211 / 当山久三銅像ハワイ建立団出発 1213 / 地区音楽発表会 1216 / 生徒会役員選挙 1220 / 二年生達成度テスト 0108 / 受験者面接指導 0116 / 英語検定試験 0119 / 県学級合唱、ソロ 0120 / 音楽鑑賞会 0130 / 町書き初め展 0130 / 三年生進路講話 0201 / 新入生保護者説明会 0220 / 三年生模擬学力検査 0222 / 美術作品展示会 0223 / 生徒会宿泊研修 0223 / 三年生を送る会 0228 / 教室整備、美化 0318
2000 ※	地区バレー 0415 / 地区野球 0422 / 地区野球大会 3 位、地区バスケット、サッカー強化大会 0429 / 遠足 0502 / 部活動結成式 0508 / 新入生歓迎球技大会 0520 / 地区卓球バレー 0527 / 県野球 2 位、卓球女子 3 位 & 個人戦 0610-11 / 県陸上共 3 位 0709 / 県野球 3 位 0730 / 地区サッカー 0815 / 地区野球、バスケット大会 0826-27 / 地区駅伝大会 0910 / 運動会 0924 / 地区陸上 1008 / 地区駅伝 1104 / 地区バレー女子 2 位 1126 / 地区バスケット女子 2 位 1202-03 / 地区バレーテニス大会 1216 / 地区駅伝大会 1 位 1217 / 地区剣道大会女子 1 位 1223 / 地区テニス大会 3 位 1227 / 地区バレー大会 0106 / 地区サッカー 2 位 0114 / 県テニス女子入賞 0203 / 地区バレー大会、県サッカー、地区野球 2 位 0224-25 / 地区野球大会 2 位 0326	理科野外学習 0418 / 生徒会専門委員会結成式 0424 / 標準学力検査 0428 / 移民体験事前宿泊研修 0513-14 & 0520-21 & 0527-28 / 子どもサミット 0514 / 生徒総会 0607 / ハワイからの学校訪問 0704 / ハワイ移民体験航海社行会 0705、翌日移民 100 周年記念航海体験学習出発、帰校 0729、交流会 0731 / 地区吹奏楽ソロ 0811 / 少年の主張 0907 / 進路学習会 1004 / 校内意見発表会 1025 / 校内合唱 1110 / 地区お話し会 1120 / 地区中文連・音楽発表会 (1 クラス中央大会へ) 1125 / 生徒会役員選挙 1215 / 学力向上対策実践発表会 1218 / 県音楽発表会 1226 / 二年生達成度テスト 0110 / 新入生説明会 0216 / 臨時生徒総会 0227
2010 ※	部活結成式 0423 / 新入生歓迎球技大会 0430 / 選手激励会 0603 / 地区夏季総合体育大会 0605-06 / スポーツ講演会 0702 / 県総体選手激励会 0716 / 県中体連総体 (卓球女子、男女バレー、男女剣道、陸上、柔道) 0723 / 九州大会 0807 / 地区駅伝 (5 位) 0905 / 運動会練習開始 0906 / 運動会 0919 / 地区陸上激励会 1001 / 地区陸上 (男 6 位、女 8 位、総合 8 位) 1002 / 県中学校陸上 (7 名出場) 1016 / 地区駅伝 (男子 4 位、女子 5 位) 1106 / 親父の会部活動生徒との対戦 (サッカー、バレー) 1109 / 県駅伝男子 17 位 1120 / 地区新人総体 1211-13	新入生説明会 0409 / 専門委員会結成式 0419 / 全国学力・学習状況調査 (3 年) 0420 / 標準学力検査 (全学年) 0513 / 校内読書週間 0524-0603 / 地域めぐり 0527 / 生徒総会 0531 / 第 1 回英検 0611 / 地区英語 0619 / 県英語 0703 / 親子進路学習会 0707 / 校内意見発表会 0708 / 県吹奏楽銀賞 0722 / 生徒会研修 0812-13 / 実力テスト 0901-02 / 地区少年の主張 0903 / 校内読書月間 0924-1024 / 修学旅行・入試説明会 (3 年) 1006 / 英検 1015 / 職場体験学習 1019 / 合唱 1029 / 数学検定 1030 / 漢字検定 1105 / 地区意見発表会 1110 / 地区文化祭 1121 / 修学旅行 1130-1202 / 到達度テスト 1202 / 生徒会役員選挙 1213 / 吹奏楽部定期演奏会 1219 / 県吹奏楽 1226 / 某先生講演会 0114 / 学級合唱発表会 0115 / 英検 0121 / 芸術館紹介 0203 / 県生徒表彰 1204 / 数学検定 1205 / 県吹奏楽ソロ 1206 / 新入生説明会 0216 / 模擬テスト (3 年) 0224

※ 1990・2000・2010 年度は末尾に詳細な活動成果の記録あり (分量的に多く、本表には掲載できなかった)

『学校沿革』に記述された生徒の諸活動を 1950 年度から 2010 年度に至るまでを概観してみると、体育系・文化系ともに発展の一途をたどっていることがわかる。1950・60・70 年度は生徒の諸活動の成果に関する記述量が後の時代と比べてかなり少ない。また、その活動は野球・バレーボール・陸上競技が中心で種別が限られていた様子もうかがえる。「当時、部活動といっても、野球部とバレー部だけだったのでは? [1960 年度卒]」「入学当時、男子のほとんどが野球部に入部し……多くの新入部員がやめていき最終的に同級生八人が残り [1971 年度卒]」(金武中学校 1999 : 99,123)。

この時期は、限られた部活動種別のレギュラー選手たちとその他が強く分離された濃淡のある参加形態がみられ、なおかつ秩序強化の効果を持つ表彰儀礼の機会が多くは必要とされていなかったことをうかがわせる。ただ、金武中に所蔵されている最も古い時期の卒業アルバム（1966～67年度）をみると、体育系で9、文化系で12の組織が確認でき、生徒らしい諸活動の受け皿が高度成長期を通じて充実し独自の活動エリアが育ちつつあったようである。にもかかわらず『学校沿革』への記述が少ないのは、対外的な競技大会がまだ少なく、また生徒の諸活動それ自体が後年に比べ学校全体としての大きな意味を持ち得なかったことを意味しているのかも知れない。

これに対し、1980年度は体育系・文化系とも相当な記述量の増加がみられ、例えば大会での受賞生徒の氏名、順位、競技スコアまで細かに記されている（この詳述の傾向は1975年度の校長交代後、1977年度ごろからはじまり、1981年度まで続いた）。この時期になるとより幅広い生徒がこれらの活動に参加し活躍している様子がわかる。校内大会、地区大会、県大会、九州・全国大会など、対外的な活躍ぶりを『学校沿革』から数多く見出すことができる。ちょうど1980年度において生徒の諸活動執筆量が多いことは、厳しい受験競争や荒れた生徒たち（しばしば集団授業ボイコットもみられた）への教育困難を乗り切り学校秩序の維持を図ろうという意図があったことも垣間見られる。**図表3**で1980年度『学校沿革』の平均文字数が他の年度に比べ最も多くなっているのはこのためである。1970年度以前と比べると、生徒の諸活動は躍進を遂げ、多くの選手たちの功績が讃えられ、生徒らしい姿を少しでも多く実現することが期待されていた時代状況を感じさせる。

このように生徒を晴れやかに讃える記述傾向は後期段階以後も続く。1990年度以後はさらに生徒の諸活動に関する記述が著しく拡大・多様化し、**図表6**におさめきれない程の量が『学校沿革』年度末尾に掲載されている。各種生徒の活動成果に対し個人として讃えられた延べ人数と団体競技延べチーム数は、『学校沿革』の3つの年度分で把握できた限りになるが、1990年度で565名6チーム、2000年度で308名14チーム、2010年度で301名24チームにもものぼった（1990年度は「版画コンクール」受賞者121名と英語検定合格者162名が加わったため数値が大きい）。また、1990年度以後は英語検定や数学検定、漢字検定などの学力面での成果が含まれるようになっており、なおかつ個人を讃える局面が飛躍的に増加したのが特徴的である。例えば吹奏楽はソロ・デュエット・アンサンブルの小規模コンテストが開催されるようになった（上記の数値のうちアンサンブル五重奏は個人5人受賞とカウントした）。

ある学校関係者の方にはうかがった話によれば、近年は「生徒はおとなしくなったが、難しくもなった」という。また、各種表彰の大幅な拡大の背景には、受験時の内申書の充実、英検などの資格をとることで生徒が自信をつけること、そして担任が「クラスのまとまり」をつけるため、などの目的があるとのことである。1990年代に入ると、それ以前の1980年代的ツッパリ文化が影をひそめ、その集団的・集合的性格が後退し、生徒たちに潜在的で複雑な「新しい荒れ」の時代が訪れる。近年日本の教育統計調査の結果によれば、特にいじめなどの目に見えにくい荒れは小学校から中学校段階にかけて多いとされ、「悪口・冷やかし・無視などのコミュニケーション系がどの学年でも最も多く」なっている（久富2013：161、大原・田中2015：84）。現在は時に「学級崩壊」のような授業不成立問題も指摘されるが、1980年代のようなあからさまな集団的結束にもとづく秩序破壊的局面が目立たなくなった反面で、このような見えにくい個人的な人間関係問題が潜行するようになった。現在の「新しい荒れ」は把握そのものがきわめて難しく、従って『学校沿革』にそれが記述されることはない。

本田由紀の指摘によれば、友だちが多い、運動・スポーツが得意である、音楽や絵画が得意である、

という知的教科外に属する領域での良好な自己認識は若者の「がんばり・努力」志向に向かわせることに影響を与えているという。そしてその「がんばり・努力」志向の高さはテストの得点と高い正の相関がある（本田 2005：99,109）。このような傾向が広く一般に当てはまるとすれば、多方面にわたる生徒の諸活動を個人主義的に讃える機会が増加していることは、生徒たちの集団的凝集が弱まり、競争秩序の現代的弛緩が広がるなか、これをくい止めようという意図とともに、学校で測られる能力の多元化が進みつつあることを象徴しているようにもみえる。

4. 「選択」の時代を生きる若者たち——結びにかえて

『学校沿革』の生徒の諸活動・成果記事は、1987年度から（日々の「諸行事」記録の中に埋め込まれず）末尾に一括掲載されるようになり独立した。これに対し 2015年度からはその生徒の諸活動・成果記事が他の文書に記載されるようになり、これとの重複が避けられ、大きな大会での成果を除き『学校沿革』に記されることが少なくなった。それぞれ、生徒の諸活動拡大・多様化に伴う『学校沿革』の書記文化的な変化の局面であるといえるだろう。諸活動の成果は、大会の場、あるいは学校・学級・個別に讃えられることもあっただろうが、『学校沿革』という資料のみではそのような表彰儀礼→秩序化が具体的にどのように図られたのかを読み取ることは難しい。ここではB.バーンステインによる理論的研究から個別表彰拡大の意味について解釈を加えたい。表出的秩序（信念や道徳の伝達を統制する秩序）は歴史的な推移の中でその伝達方法を大きく変化させた。すなわち、生徒が固定化された属性（年齢や性別など）に基づいて集団を形成する成層化された学校のもとにおいては、表出的秩序は儀礼化された形をとるのに対し、個性化された学校では、属性による集団が形成されず、表出的秩序の伝達の基盤は弱体化する。成層化された学校において表出的秩序の伝達は官僚制的で、非言語的・間接的な儀礼に基づくが、個性化された学校にあっては「個人別治療型」となり、「個性間の関係のなかで動機や心理的傾向をことばによって操作する」形をとる（バーンステイン訳書 1977=1985:72-74）。この類型的分析に従えば、後期段階における生徒の諸活動に対する表彰儀礼は、ことばによる、個別化され、細分化された形を手段とした表出的秩序の伝達をはかれるようになったとみることができる。この70余年の間に地域は大きく変貌を遂げ、その強固な社会的紐帯と人間形成の力は融解し、その主要な舞台は学校へと移行していった事情から、生徒の諸活動やそれに対する個別表彰や評価の持つ意味も相対的に大きくなったことは確かである。

全国学テに象徴される学力向上を促す動きの中、沖縄県では2005年度入試から高校通学区域の弾力化がなされ、金武中でも進学する学校を選ぶ自由が広がった³⁾。学校関係者の方の談によれば、そのような学校選択の拡大の中には、受験面での有利さを求めるものだけでなく、「いじめ・いじめられ関係をリセットしたい」という切実な動機に基づくものもみられるという。また、SNSがらみのトラブル処理は担任教師にとって「仕事上のストレスが非常に高い」ものだとされ、校務分掌の工夫や生徒・保護者向けにその関連の講習会を開催することにも力を入れているという。

学力競争はその学校にある秩序が存在していることを意味するものであるが、1980年代から現在にかけてその性格が大きく変化したとされる。すなわち1980年代において競争はほぼすべての者が「空気」のように前提とする認識の上でそこに「乗る・降りる」に分化するものだった。これに対し1990年代半ば以降は競争の正統性じたいを「承認する・しない」に分化する根本的な新しい認識のもと、「ある面での〔1980年代閉鎖的競争からの〕開放とそれゆえの一層の厳しさへの晒され、そこで自覚的に迫られる自己形成方向の選択」（久富 2004：361）という課題が若者に重く

のしかかるようになった。現在の若者たちは、日常生活でどんな人柄を演じるのか、その中で支えとなる「誰とどのような親愛感情にもとづく純粋な関係」(富田 1999: 83) を築き居場所を確保するのか、多種多様化した学校の諸活動のどれに携わるのか、競争をどのように受けとめ、どんな進学先や職業を選択するのか、それらの諸選択を人生の中にどのように意味づけるのか、という形で試行錯誤せざるをえないハイリスクな時代を生きている。そして教師・保護者・地域もまたどのような学校文化を形成することが現在の「選択の時代」を生きる生徒たちの支援につながり、良好な秩序を確保しうるのかを模索する課題を負っている。

【注】

- 1) このような若者たちの三層構造については、田嶋 (1990: 40-44) に示唆を受けた。
- 2) 各年度の年間平均執筆量に差があるかどうかを一元配置分散分析で調べた。各年度の文字数をカウントする際、書き出し・末尾に掲載された統計データ (教員異動や生徒数など) などは除外し、日々の記事のみを対象とした。Welch の修正分散分析により 0.1%水準で有意差がみられ ($F(6,1109.62) = 19.16, p < .001, \eta^2 = 0.03$)、年度ごとの平均執筆量に差があることが確認された。Levene の等分散性の検定で分散が等しくなかったため、多重比較には Games-Howell 法を用いた。
- 3) 「沖縄県立高等学校の通学区域に関する規則」より (<https://www.pref.okinawa.jp/edu/kenritsu/nyushi/ko/documents/tuugakuku.pdf>, 2019年11月1日閲覧)。

【参考文献】

- ベック・U (1986=1998) [東廉・伊藤美登里訳] 『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。
- バーンステイン・B (1977=1985) [萩原元昭編訳] 『教育伝達の社会学——開かれた学校とは』明治図書。
- 本田由紀 (2005) 『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 金武町企画開発課 (1991) 『金武町と基地』金武町。
- 金武町立金武中学校 (1999) 『創立五十周年記念誌』私家本。
- 岸政彦 (2013) 『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版。
- 久富善之 (1993) 『競争の教育——なぜ受験競争はかくも激化するのか』労働旬報社。
- (1996) 「学校文化の構造と特質——「文化的な場」としての学校を考える」堀尾輝久・久富善之編 (講座学校6) 『学校文化という磁場』柏書房。
- (2004) 「「新・競争の教育」と企業社会の展開」渡辺治編 (一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究1) 『変貌する〈企業社会〉日本』旬報社。
- (2006) 「「地域社会と学校」の文化論的課題」一橋大学〈教育と社会〉研究会編『〈教育と社会〉研究』16号。
- (2013) 「学校・学級に〈いじめ風土〉を超える新しい風を」教育科学研究会編『いじめと向きあう』旬報社。
- 松岡政幸他 (1994) 『宮里武栄先生を語る』私家本。
- 仲嶺政光 (2018) 「『学校日誌』を読む——学校文化の社会史研究に向けて」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』第20巻 (<http://doi.org/10.15099/00019174>)。
- (2019) 「戦後日本における前期中等教育の初期段階秩序——沖縄県金武中学校の場合」一橋大学〈教育と社会〉研究会編『〈教育と社会〉研究』29号。
- 大原さつき・田中謙 (2015) 「学校におけるいじめ内容の特徴に関する研究——大学生に対する回顧調査を通して」年報『教育経営研究』Vol.1, No.1, 山梨県立大学人間福祉学部教育経営研究室。
(http://libweb.nlib.yamanashi-ken.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002repository_khk2015013)。
- 田嶋一 (1990) 「報告2 共同体の解体と〈青年〉の出現」叢書産む・育てる・教える——匿名の教育史第1

- 巻編集委員会『〈教育〉——誕生と終焉』藤原書店。
- 富田充保（1999）「友だちだけどころ疲れ——気づかいあう仲間関係の現在と可能性」片岡洋子・佐藤洋作編「中学生の世界」2『中学生をわかりたい』大月書店。
- ウォーラー.W（1932=1957）〔石山脩平・橋爪貞雄訳〕『学校集団——その構造と指導の生態』明治図書。